

センター主催シンポジウム2

ドイツの教育システムー中等教育から初等教育への改革シフトー

講演者 Fried Lilian (ドイツ・ドルトムント大学 教授)

報告者 秋田喜代美(教育心理学コース 教授)

実施日 2010年10月6日

於 教育学部第一会議室

本講演ではまず最初にドイツにおける学校教育制度体系についての説明がなされた。

第一の大きな近年の動向として、ドイツの教育改革はPISAショックと呼ばれるOECD PISAでのドイツの学力テスト結果がOECD平均読解力、数学、理科のいずれの結果においても低かったことへの反省から始まった点が指摘された。そしてコンピテンスに基づく教育制度改革が始まった。

これは具体的にコンピテンスの下位要素を同定しそれを実現していく考え方である。コンピテンスベースのカリキュラムではまず具体的にコンピテンスのモデルを作り、生徒の実態、成果と学びの過程の関係を検討し具体的な課題にもとづいて実際のカリキュラムを作っていくものである。実際に読解力についてこのモデルにもとづく読解指導を継続することで縦断的に効果があることが実証されてきている。

また第二にとして、「幼稚園から小学校への移行」への改革を挙げることができる。中等教育改革から初等教育へと改革の力点が変わってきているのが一つの特徴である。ドイツでは教育省管轄の小学校と社会福祉省担当の幼稚園ではカリキュラム、行政、教育の質等において大きな違いがあったためその円滑な移行をめざす変革である。カリキュラム改革として、学校入学時点で子どもが習得しておくべきコンピテンスを明らかにし(社会情緒的、言語、算数、自然科学の能力)た。そして授業に対応するための子どものコーピング方略と移行のための教師の誘導の仕方が研究され、継続的

な幼小の協働が確立すべく度靴の16州すべてにおいて同じモデルでの改革に取り組みされた。また行政制度の改革として統合的、柔軟な入学時期を設定し、入学年齢において制度的により柔軟にできるようにした。つまりより早期からあるいは遅らせて入学することが可能となった(日本と違って、小学校入学は月令で個人単位で入学する方法がドイツではとられている)

保護者と園、小学校の先生が実際に子どもの状況をみて共同で入学時期を相談して決定していく。その主な目標は子どもの個人の能力の発達に状況が当たっている。それによって実際には1995年から2006年までの早期入学、遅滞入学を見ると遅滞入学が増えており、きちんとその子どもの能力に見合った形が選択されるようになってきている。

実際に実践として教育の質の改革のためにTrans Kigs(幼稚園から小学校への移行)プロジェクトが国家レベル予算で5つのモデル州プロジェクトとして2005年10月から2009年12月まで取り組まれてきた。それは子どもの学習の質を高めそのために高次の質の移行を保障しようとするものである。

そしてこのプロジェクトの効果評価研究が計画され実施された。その評価法として、結果の質は個人テストで、また教育を行う教師の教授能力の質の評価は園で、また質問紙で保護者と幼小の教師に入力と方向性の質についての質問紙を実施している。そこでの教師の質に関しては、教育改革に対して積極的に改革に取り組もうとするタイプと保守的

な教師の態度がありその2態度と実際の子どもの成績の関係をみると明らかに積極的に幼少連携改革を進めようとしているものでより高い力が子どもについている割合がたかく保守的な態度の教師では効果的な変化は改革において見られなかった。つまり教師の態度が大きな影響を与えているということが出来る。

教師教育用に6種類のツール(組織、関係施、適応的支援、言語的認知的挑戦、数学的、認知的挑戦)を用意し、評価基準票をそれぞれについて最小限の質を達成できているか、目指すべき卓越した質とは何かをとらえられるように作成した。それによって具体的に子どもの成果にむすびつけるような効果を得ている。

コンピテンスに応じたカリキュラム、それぞれのコンピテンスに対応した指導方法のための教師教育、それぞれのコンピテンスにもとづいて教師がおこなっていることを評価することの往還的な実施によって質の改革を達成することができていくのである。

上記のような内容での話をいただいた後、フロアからそれぞれ具体的な **Transkigs** の方法や制度、日独の差異等についての質疑応答が活発になされた。